

パラリンピックを見直した

長尾 進一郎

テレビで東京二〇二〇パラリンピックの車椅子ラグビーを見た。トライを奪うにはボールを持って相手のゴールエリアを車椅子で通過すればよいので、頻繁に得点が入る。相手の動きを封じるタックルは車椅子同士の体当たりで、見ていて怖い位である。パラリンピックの競技をじっくり見たのは今回が初めてだ。

競技種目数は五三九とオリンピックを大きく超えるが、これは同じ競技でも障害クラスにより複数の種目に分れるためだ。陸上男子車椅子の伊藤智也選手は、直前になって障害クラス的一段階軽い種目に変更され、メダル獲得が絶望的となった。それでも出場し予選落ちとなる中、記録は自己ベストを更新して意地を見せた。

競技にはオリンピックとほぼ同じ種目もあるが、車椅子ラグビーのほか、ゴールボール、ボッチャ、ブラインドサッカー、こん棒投げなど、パラリンピック独自の種目も数多い。障害の種類と程度に応じて、多くの選手が参加できるように発展してきた歴史を感じる。

印象に残ったのは、出場選手が実に生き生きとプレーしていることだ。障害を受け入れて自分独自の技術を磨き、目標に向かって全力で挑戦している姿に感動した。両腕の無い卓球選手は、ラケットを口に咥え足でボールを放り上げ巧みにサーブをしていた。車椅子テニス世界ランク一位の国枝慎吾選手の、緩急を使い分けたりターンなどは芸術レベルと思う。

今回、パラスポーツ観戦の予想以上の面白さに気付いたのと、障害者と健常者という意識の上での区別が以前より薄らいだ気がした。

絶対的な運動能力を比べれば、パラリンピック選手はオリンピックの一流選手に適わないだろう。一方で補助具の改良などにより、義足の選手の走り幅跳びの記録が年々向上しているという。将来、オリンピックの走り幅跳び競技で、義足で出場した選手が優勝するという可能性も出てくる。オリンピックとパラリンピックの境界の議論も、今後活発になるのではなかろうか。